(28) 宮崎市 檍(あおき) 1号墳の調査と木槨の概要－その2－

柳 沢 一 男

古墳所在地：宮崎市吉村町江田原
調査歴：1994年，墳丘測量［文献③］。
2000～2003年，発掘調査［文献⑤・⑥］

文献：①近藤義郎編　1992『前方後円墳集成』九州編。
②野間重孝　1993「檍古墳群」『宮崎県史』資料編考古2。
③柳沢一男　1995「宮崎県の古墳資料(2)」『宮崎考古』第14号。
④近藤義郎編　2000『前方後円墳集成』補遺編。
⑤柳沢一男　2003「檍1号墳木槨の調査」『東アジアの古代文化』114号。
⑥柳沢一男　2003「宮崎市檍1号墳の調査と木槨の概要」『日本考古学協会第69回総会研究発表要旨』。

Ⅰ．古墳の概要と調査内容

古墳名は旧檍村に所在したことからの命名。日向灘の現海岸線から2kmほど内陸側の砂堆（下田島Ⅱ面）南端に位置する。弥生前期の檍遺跡調査地点から250mほど南側にあたる。砂堆地形に沿って前方部を南に向けた前方後円墳。00～03年にわたる5次の調査によって，墳形と規模，埋葬施設のおおよそが判明した。

【墳丘】

墳長52m，後円部は短径35m，長径38m，同高4.5m，前方部長約17m，同前面幅約20m，くびれ部幅15m，同高1.7～2.0mを測る（図2）。

後円部平面形は，くびれ部とのあいだに連結部をもつ倒卵形をなす。前方部は低平で短く，先端が撥形に開く（纒向型前方後円墳に類似）。墳丘盛土は後円部上半のみ，前方部は地山削り出しによる整形。葺石は無し。段築は不明。砂堆上にあるため，墳丘基底面・盛土ともすべて砂・砂質土である。

【埋葬施設】

後円部中央より背面側に偏して，墳丘長軸に直交方向に構築された木槨である。02年の第4次調査の際に，墳丘の断面調査によって木槨の埋没を確認し，03年の第5次調査で完掘した。

木槨の規模と構造（図3）：壁・天井部材が腐植・崩壊しているため，検出できたのは最下部に据えた壁部材の痕跡だけである（図3，断面図参照）。

木槨最下部での平面規模は，北辺7.0m，南辺7.4m，東辺3.5m，西辺4.2m。東西に長い長方形だが，南辺（前方部側）が部材継ぎ目で屈曲し，歪んだ長方形をなす。木槨床面に床材を敷いた痕跡は不明。もともと床板はなかったと推測される。木槨の正確な高さは不明だが，木槨検出面から底面まで約1.5mを測る。

南・北辺の長側壁のほぼ中央，側壁内側に沿って直径30cmの柱痕跡がある。長側壁を支える支柱であろう。支柱の背面で東・西側の2本の角材を継ぐ。東西の小口壁は，1本の材を置いたものだろう。長側壁と小口壁の接合は，前者が後者を挟み込む構造である。木槨四隅に支柱痕跡を確認することができなかった。釘，鎹などが未検出のため，長側壁端近くにホゾを切って組み合せた構造と推測される。

木槨長側壁の最下部に使用された部材は，厚さ20～25cm(断面観察による)，長さ約4.0m前後，高さは不明だが，後述する点から30cm前後の角材と推測される。おそらく同程度の木材を5～6段程度積み上げ，天井にも同様な木材を南北方向に並べたと推測される。

木槨の規模から，内部に間仕切りがあった可能性もあるが，明確な痕跡を認めることはできない。

木棺の規模と構造：木槨内の埋葬棺は，北西側に偏して東西方向に据え置かれた木棺である。棺の外法は東西長が2.0m，東小口幅1.2m，西小口幅1.0m。横断面はほぼ半円形，小口側は垂直に立ち上がり，割竹形木棺と推測される。床面から木棺底面までの深さ0.35～0.4m。東小口側が広く，底面高も東側が高いから，遺体は東頭位で埋葬されたと推測される。棺の外径は約1.2m前後であろう。棺内は完掘したが，棺内からの赤色顔料，副葬品は未検出である。木棺配置は，墓壙下部の整地と併行して行われ，その後に木槨

が構築されたことが判明した。

【墓道】

前方部頂面のやや西側くびれ部寄りから，木槨南辺中央に接続する墓道が検出された。幅5.0m前後，長さ約17m，深さは最深部で0.7m，横断面は浅皿状をなす。墓道底面は入口から木槨までほぼ水平にちかい。墓道は墓壙と同時に掘削された可能性がたかく，墳丘盛土構築時に埋め戻している。木槨南辺に接続する部分はきわめて丁寧に埋め戻され，底面から0.6mほどの高さに橙褐色砂質土（ボラを擂り潰して微砂と混ぜたものか）が，10cmほどの厚さで3×5m程度の範囲に敷き詰められている。

II．木槨・木棺と墓道の構築手順

調査結果を整理すると次のように復元される。

①後円部の地山（砂層）を削平して整地した平坦面に，東西約9.0m，南北約6.0m，深さ0.4～0.5mの浅皿状の墓壙を掘削する。前方部頂面から墓壙に接続する長さ約17mの墓道も同時に掘削されたとみられる（墓壙・墓道接続面の底面は同一高）。

②墓壙底面から南・北二辺の長側壁側中央を支える支柱の掘り方を掘削し，直径約30cmの木柱を据える。柱掘り方は直径1.6～1.8m，深さ0.6m程度。地山が砂のため掘り込み角度は緩い。

③凹凸のある墓壙底に20～40cm程度の厚さで埋め土を行い，木槨を据える面を整える。木槨内の北西寄りに検出された割竹形木棺は，この過程で棺身を据え，棺身上端近くまで埋め込まれたと想定される。この際南側長側壁と東小口壁材を先にL字形に置いて，整地作業を行ったらしい（断面観察からの推測）。

④木槨長側壁・小口壁を組み上げる。2段程度で一時中断した可能性がたかい。さきに述べた橙褐色砂質土を木槨南辺長側壁の中央外方に丁寧に敷き詰めている。墓道遺体埋葬に伴う儀礼の場として整えられた可能性がたかい。遺体埋納はこの段階。

⑤壁部材を一段ずつ組み上げ，木槨外方の盛土を繰り返す。壁部材を5～6段組み上げて壁体が完成する。壁体外方壁体上部に，天井部材を架構する（部材は小口に併行して架け並べたと推測される）。天井部材上を白色砂で覆い，その上部を黒砂で覆う。後円部墳丘と墳頂平坦面を整えて築造を終える。

なお，①段階行程は，地山削り出しによる墳丘下半の形状が整えられてから行われたか，それとも墳形整形に先行したかは，確定できない。

III．出土土器と築造時期

木槨・木棺内を精査したが，無機質素材の副葬品を検出することはできなかった。有機質素材の副葬品を伴った可能性を否定できない。わずかに，木槨検出面（墳頂下－30～－50cm）周辺から出土した土師器片（高杯・小型丸底壺など）のみである。高杯・小型丸底壺の器面には赤色顔料の塗布が認められる。整理作業が終了していないが，現状では布留2式に併行する段階と推測される（図6）。この祭祀使用土器が，果たして木槨構築時のものか検討を要する。

IV．木槨の特徴

以上述べたように，檍1号墳の木槨は，これまで日本で確認されたこの種遺構の構造との違いが大きい。その特徴をあげれば次のとおりである。

①深い墓壙を伴わない。したがって，木槨構築は墳丘盛土と併行する。

②墓道を伴う。作業用通路か？

③槨の規模が大きい。

④槨内に割竹形木棺を埋置する。

⑤木槨構築材に厚い角材を使用する。

⑥長側壁・小口壁の接合はホゾ切り・落とし込みと推測される。

⑦木槨四隅の隅角に支柱を立てていない。

V．檍1号墳の特質と評価に向けて

檍1号墳は，纒向型に類する墳形，大型木槨と割竹形木棺，前方部頂面から木槨に通じる墓道掘削，槨・棺内の無機質副葬品の皆無の4点に特徴がある。未確認の段築は盛土が砂質土で流失しやすいため，当初からなかったと断定することはできない。

近年注目を集める木槨は，最新の集成（有馬　伸2003「3世紀以前の木槨・石槨」和田晴吾編『古代日韓交流の考古学的研究－葬制の比較研究－』）によれば，19の墳墓から検出された26例が提示されている。最近報告書が刊行された香川県原間6号墳を加えて27例となるが，調査時に木槨と判明した事例は少ない。

木槨の最古例は弥生中期前半の福岡県比恵遺跡，最新例は原間6号墳の5世紀中葉。不明瞭であった既調査例の再検討がすすめば，さらに増加するだろう。木槨の規模・構造，棺，構築法はきわめて多様である。木槨の用語に惑わされることなく，多様な変異相の時空的解明を行う必要があろう。

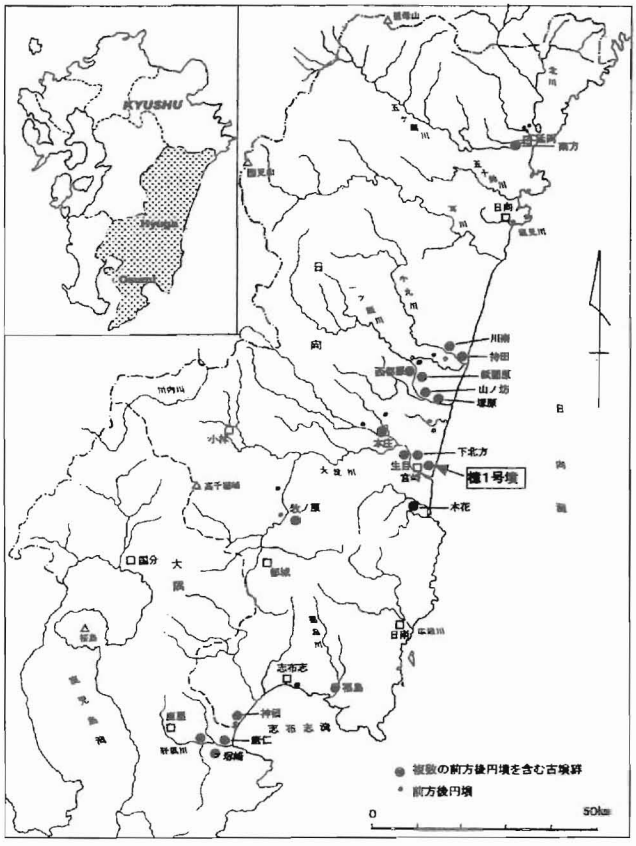

図1　南九州の主要古墳分布図と橦1号墳の位置

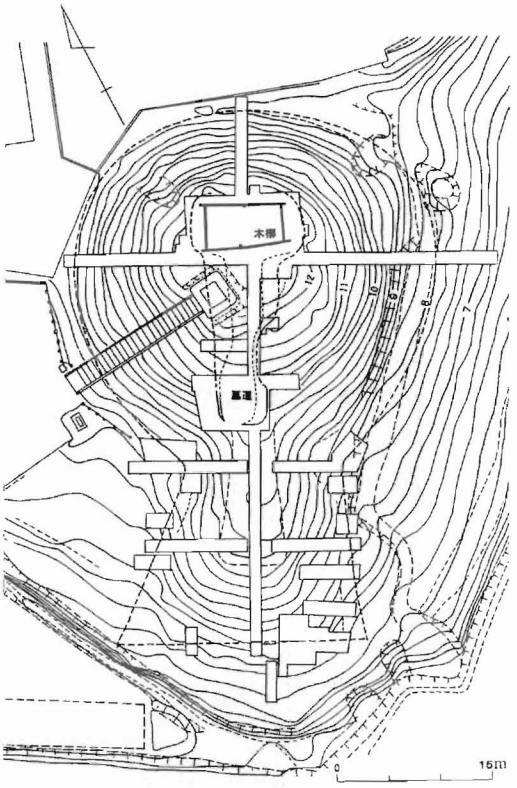

図2　調査区と木槨・墓道の位置

図3　木槨と墓道断面（北から）

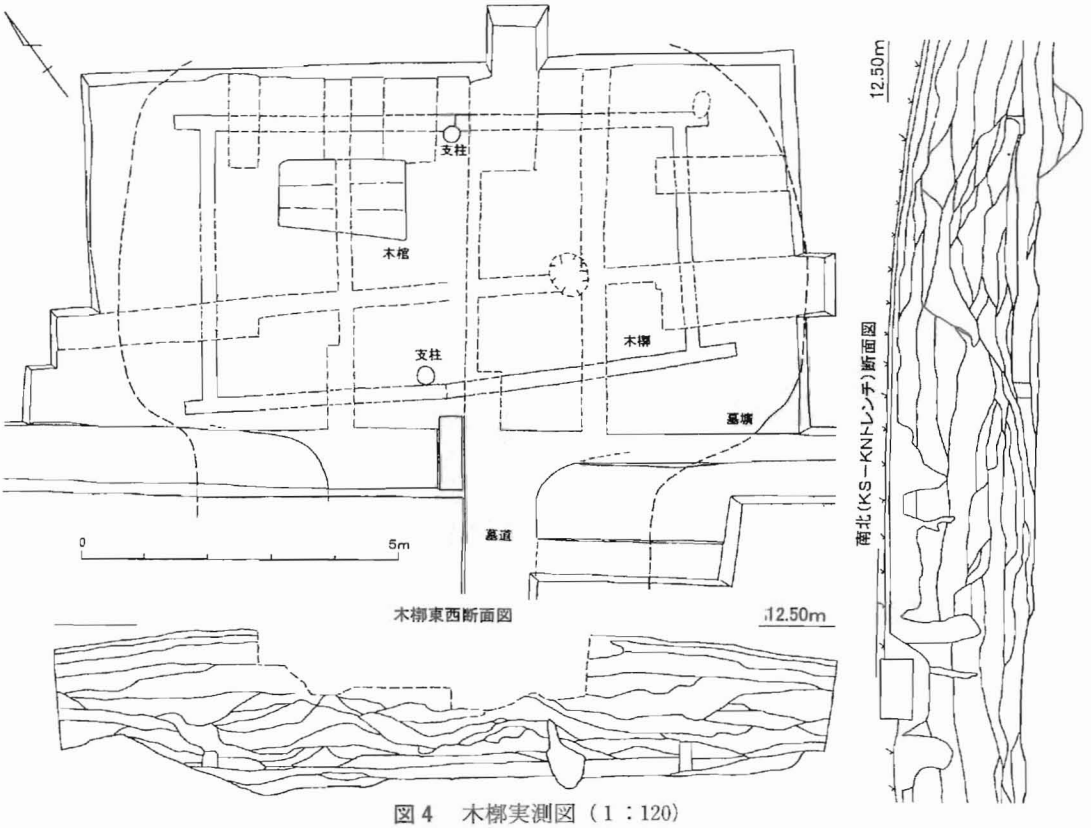

図4　木槨実測図（1：120）

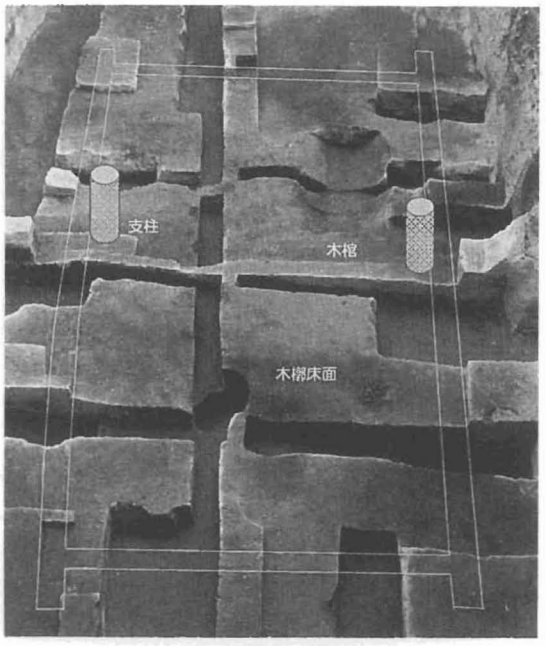

図5　木槨全景（東から）

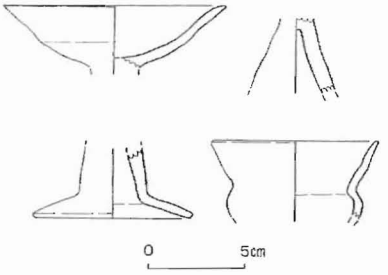

図6　出土土師器実測図（1：4）